【論文】

アウグスティヌスの創造論におけるギリシア哲学概念の変容

――永遠・時間と形相・質料――

河野　一典

序　アウグスティヌスの創造論

まず表題にある「アウグスティヌスの創造論」という言葉について確認しておきたい。本論で言及する「創造論」とは、アウグスティヌスが生涯にわたり幾度となく試みた『創世記』冒頭の解釈[1]に基づくものである。具体的に言えば、被造物としての世界の成り立ちを探求する以下のような問いに集約される。

> われをして聞かしめ理解せしめたまえ。いかにしてあなた［神］は「はじめに天地を造りたもうた」のか。[2]
>
> いかにして神は、自ら何の変化もなく、可変的時間的なものを産出したのか。[3]

この問いは、生成消滅を繰り返し、運動変化するこの可変的・時間的世界の根底に、不変不動の存在があることを確信し、その不変不動の存在とそれによって秩序づけられた自然的世界との関係付けを探求するものである。それはたとえば「あるもの」は「不変・不動」、「永遠」、「一」であるとするパルメニデスをはじめとする普遍的なギリシア哲学の探求を継承しているということができる。

したがってアウグスティヌスの創造論は、ギリシア哲学の世界観をキリスト教創造論に基づく世界像へ移し変えていく試みであると言うことができる。すなわちアウグスティヌスの一連の『創世記』注解、『マニ教徒を論駁する創世記注解』から『未完の創世記逐語注解』を経て、『告白』第一一巻～一三巻及び『創世記逐語注解』『神の国』に至る解釈の経緯・過程を見るとき、それはアウグスティヌスがマニ教的二元論の世界観を超克し、一神論に基づくキリスト教創造論・存在論を論理的に構築していく過程を浮き彫りにしていると思われる。しかもその過程において確かに新プラトン主義哲学は重要な手立て・役割を果たしている。

他方このような世界の成り立ちに関する問題に直接的に答える仕方で彼の『創世記』注解・創造論は進まない。ギリシア・ラテン教父の伝統的解釈も踏まえ、多様な『創世記』解釈の可能性

を認めながら、彼の創造論は、自然学的な意味を超え、人間の魂の幸福論（救済論）、天使論、そしてイエス・キリスト論と渾然一体となって進められている。端的に言えば、伝統的なギリシア哲学の概念を受容し援用しながらも、聖書とイエス・キリストが介在するキリスト教創造論の存在論的解釈においては、意識的であれ無意識的であれ、その伝統的な概念に新たな意味を付加していると考えられる。

本論は以下の順序に従って論述する。『創世記』冒頭の「はじめに(in principio)」の解釈としてアウグスティヌスが一連の注解において特に詳述している1．時間の始めに2．第一に3．御言イエス・キリストにおいて、の解釈の可能性の順序に即して、各々その重要な概念である、一．永遠と時間、二．形相と質料、三．御言イエス・キリストについて述べる。そしてキリスト教固有の天使について、四．霊的知性的被造物の在り方と認識について、最後に五．アウグスティヌスのキリスト教創造論における世界全体像の帰還構造の残された問題について言及したい。

一．創造の秩序における永遠・魂・時間

プロティノスにおいては、時間は永遠のうちに安息していた魂が自ら動き出すことによって生じた。魂が永遠に模して感覚世界を作り、自己を時間化するとともに世界全体を時間の中にあらしめ、隷属させた。時間は魂のうちに見え、魂のうちにあり、魂とともにある。すなわち時間を直知界の永遠なる生命と結びつけて、その生命の分裂が時間をもたらしたと言う。言い換えれば時間とは、魂のある生活から別の生活へ移行する動きにおける生命である。[4] 他方、時間は永遠を獲得することによって、永遠（安息）のうちにあろうと欲し、延びていく生の長さ、活動の連続性を持つ。それが活動を停止し永遠へ向き直ることによって時間は永遠にして「一」のうちでとどまるのである。魂・時間は永遠にじかに触れており、永遠にあづかっている。[5]

アウグスティヌス『告白』第一一巻の時間論は、時間論固有の議論を取り出せば、プロティノスのこの思想の影響が色濃く現れている。その詳述は別に譲るとして、[6] 本論に即してアウグスティヌスの時間論の特徴的な三つの観点（Ⅰ～Ⅲ）を端的に示そう。

Ⅰ

まずアウグスティヌスは創造主の永遠のあり方と被造物としての時間とを徹底して区別することから議論を始めている。

永遠なる神が時間に先立つのは時間において時間に先立つのではない。さもなければ時間の持続の中ではいかなる時点においても常に「それ以前」があるから、すべての時間に先立つことは出来ない。それゆえ神が時間に先立つのは常に現在である永遠の高さによって先立つのである。それによって神はすべての過去の時間に先立ち、同時にいずれ過去となる未来の時間を追い越している。われわれにおいて、時間はやって来ては行き過ぎる可変的なもの、すなわち非存在から存在へそしてまた非存在へと移行するものである。それに対して神は常に同一のものとして在り、そこにおいてはやって来たり行き過ぎたりすることはない。[7] このようにアウグスティヌスはまず永遠と時間とを峻別し、永遠のもつ超越性を強調する。そして時間論を展開して、

次のように言っている。

時間は恒存（permanere）しない。なぜならもし時間が常にある（恒存する）ならば、それはもはや時間ではなく永遠（aeternitas）だからである。したがって「もし何ものも過ぎ去らないならば、過去の時間（praeteritum tempus）はないであろう。もし何ものもやって来ないならば、未来の時間（futurum tempus）はないであろう。もし何ものもないならば、現在の時間（praesens tempus）はないであろう」[8]ということである。

それでは過去、未来、現在という時間はそれぞれいかなる仕方で存在するのか。過去の時間は「もはやない（iam non esse）」未来の時間は「まだない（nondum esse）」。なぜなら過去のものは「もはやない」し、未来のものは「まだない」からである。また現在の時間は、もしそれが常に存在するものであり、過去の時間へ移行しないならば、それはもはや時間とは言われない。それは永遠（aeternitas）である。従って現在の時間にとって、時間が存在すると言われる理由は、それが過去の時間へと移行するからである。すなわち「存在しないであろう」からである。[9]

II

しかしながら、われわれにとって厳然たる事実としての時間の所在を、アウグスティヌスもまたプロティノスにならい、魂の中に見出す。すなわち三つの時間が存在する。過去のもの（praeterita）に関する現在（praesens）、現在のもの（praesentia）に関する現在（praesens）、未来のもの（futura）に関する現在（praesens）である。これら三つのものは魂の中にあり、過去のものに関しては記憶（memoria）、現在のものに関しては直観（contuitus）、未来のものに関しては期待（expectatio）がいずれも現在として存在する。[10]そして時間とは延長であり、精神そのものの延長（distentio）であると結論する。しかもこの精神の働きは、一人の人間の生涯にわたり、人々の全ての生涯を含む全世紀において行われるとして、拡大されている。[11]

III

かくして時間論の最終部はキリスト教創造論の実践的な性格を持つに到る。アウグスティヌスの時間論を展開した意図は、まさに永遠なる神の創造の業を理解すること、すなわち時間も被造物であり、時間は被造物とともに始まったこと、そして結局われわれの時間的な生の不完全な在り方を見極め、魂の完全な在り方を、創造論の中で位置づけることであった。[12]

したがって先述の精神の働きの生の分散（distentio）は人間の生の悪しき在り方を示すものとなり、永遠不変の存在への向き直りを促すことになるのである。すなわち永遠なる存在としての「一」なる神と被造物としてのわれわれを仲介するものとしてのイエス・キリストを通して、「多」なるわれわれが神を尋ね捉えるために、時間的なものに分散されるのではなく、眼前にある（ante esse）ものへ、分散（distentio）ではなく集中（intentio）によって超出（extendere）されるべきことをアウグスティヌスは説くのである。

ここにアウグスティヌスがギリシア哲学（プロティノス）の時間論を受容しその概念を変えながら、キリスト教創造論の中で

永遠なる神と被造物とを関係付ける過程が看取される。それは時間的存在者が、現在という存在に内観的に集中し、イエス・キリストを仲介することによって、永遠なる神と関係づけられている点である。内観を通して上昇する道はプロティノス哲学からの示唆が大きいと考えられるが、それを援用して、彼がキリスト教創造論ひいてはキリスト論及び人間論を展開する道筋を拓いているのである。

二．創造の秩序における形相・質料概念
――被造性の根拠――

アウグスティヌスにおいては質料には二つの側面が見出される。第一に『告白』第一二巻で詳しく論じられているように、質料は形相を受容し、形相が推移する下にある基体（受け皿としての無性質なもの）として、存在者の複合・合成という内在的な在り方を説明する一方の原理である。[13] それは時間的事物の可変性の根拠として、プロティノス[14]はもとより、アリストテレス、ストア派も含めて、ギリシアの伝統的な哲学の共通の理解である。

ところがアウグスティヌスは「天地」(Gen. 1,2) の解釈として、天は霊的無形質料、地は物体的無形質料を意味するという解釈を提起する。

> 何が「天地」という名によって意味表示されているのか。……両者〈霊的被造物と物体的被造物〉の無形質料が「天地」と言われたのか。すなわち己の内にありうる仕方で、創造主へ向き直っていない――そのような向き直りによって形相づけられ完成されるが、もし向き直らなければ無形なのである――霊的な生と、もう一方は物体的〈質料〉である。ただし視覚であれその他何らかの肉体的な感覚によってであれ、知覚されうる物体的な形象が既に存在するとき、形相づけられた質料においてあらわれる全ての物体的な性質が欠如しても、それが理解されうるならばのことである。[15]

すなわち霊的無形質料とは、創造主に向き直らず、己自身のうちにある不完全な霊的生であり、物体的無形質料とはあらゆる物体的性質を欠き、形相付けられて知覚される以前のものである。ところで物体的質料に関しては、存在者の複合的なあり方の一方の原理としてわれわれが理解することは容易である。しかしこのテキストの箇所だけを取り出せば、われわれは霊的質料という表現に違和感を持つであろう。霊的あるいは知性的なものに質料は内在するのであろうか。

そこでわれわれはアウグスティヌスが使用する質料の持つもう一つの観点を考えなければならない。彼は『告白』第一二巻二九章四〇節において、「in principio」を「第一に (primo)」と解釈する説を展開する箇所で、「先行する (praecedere)」の意味を四つに区別している。四つの「先行する」とは、(1) 永遠において先行する (2) 時間において先行する (3) 選びにおいて先行する[16] (4) 起原において先行する、の四つである。永遠において先行するとは、神が万物に先立つ場合。時間において先行するとは、例えば花が実に先立つ場合で、時間的な出来事の生起の順序である。選びにおいて先行するとは例えば実が花に先立つ場合で、価値の

上で優れているものが劣ったものより先であるという順序である。起原において先行するとは例えば音が歌に先立つ場合で、質料が形相よりも先であるという創造・製作の順序である。そして最初と最後の二つを理解することが難しいとアウグスティヌスは言っている。

この(4)の「起原において先行する」秩序は、創造あるいは製作における論理的な秩序である。そのことによって聖書の記述の順序を時間的な生起の順序でしか捉えられないマニ教徒の誹謗から『創世記』を擁護することができた[17]。それに対し『知書』一一章一八節にある「神は世界を無形質料から造った」という言葉を当初からアウグスティヌスは重く受けとめていると思われる。全知全能たる神は全被造物を無から創造した。無から無形質料は造られ、その無形質料から全てのものが造られたのである[18]。したがってここで「質料が形相に先行する」という仕方で、『創世記』の記述の整合的な解釈のために「質料」が用いられているとき、アウグスティヌスは神という制作者を明確に措定した創造の秩序を念頭に置いて用いているのである。従ってアウグスティヌスとって質料とは、先の内在的な可変性の根拠であるとともに――そこに新プラトン主義哲学の受容が看取できる――、神によって無から造られたという、被造物の被造性そのものを明示する言葉として新たな意味を付加していると考えられる。したがって霊的質料という表現も、霊的被造物が複合的な存在であるという意味ではなく、それが被造物である限り、造られたものとして創造の秩序に服していることを意味しているのである。このような意味で霊的質料という表現はアウグスティヌスにとって不自然とは感じられなかったと言えよう。そしてさらに霊的被造物と物体的被造物の固有の存在の仕方の根本的な相違が明確になっていると考えられる。

三．創造の始原(principium)としてのイエス・キリスト

『ヨハネ福音書』八章二五節に次のようにある。

彼ら（ユダヤ人達）はイエスに言った、「あなたは誰か。」イエスは彼らに言った「始原である、というのは私は君たちに語りもするから。」

ここでイエスは、自らを始原と言っていることを典拠に、アウグスティヌスは『創世記』冒頭の「はじめに(in principio)」を「始原において」すなわち「御言・イエスキリストにおいて」と解釈する立場を提示する[19]。

神の言・御言は神の理念(ratio)を表している。しかも御言は音声のように時間的な被造物の動きではない。もし時間的な仕方で神が語り、天地を造ったとすれば、天地の存在以前に既に物体的被造物が存在していたことになるからである。従って御言は音声ではなく神と等しく永遠の御言である。御言は神の永遠の理念(aeterna ratio)を言い表している。それゆえ全ての被造物は、存在し始めるべきであるとか、存在することを止めるべきであると、神の永遠の理念において知られるまさにその時、存在し始めたり存在することを止めたりするのである。ここで御言が置き換えられた「永遠の理念」は、複数形で使われるテキス

トにおいて、創造論においても事物の範型因としてのイデア（ロゴス）を意味すると解しても良いであろう[20]。

他方、御言が、イエスキリストを通して耳に聞かれる仕方で語られ、我々が聖書においてそれを読むことが出来ることを、アウグスティヌスは意義深く考えている。始原とは、われわれがそこから存在するところの存在の拠り所であり、われわれが迷うとき、存在の拠り所に立ち返るように、われわれに教えてくれるものであると言われている[21]。

『創世記』冒頭にイエス・キリストを読み込む解釈によって、彼の創造論は人間の魂を含む霊的被造物の至福論等の実践的な問題に連関する。その特徴的なテキストを取り上げよう。それは『創世記』冒頭一節の「天地」を造るとき、三節の「光」を造るときのように何故「成れ」と言って造らなかったのか、と言う問いをたて、そこから「天地」はいまだ形相づけられていない無形質料の意味に解する論述を行う箇所である。

> 聖書が「神が言った、成れ」と述べていることに関して、われわれは神と等しく永遠で、不完全な被造物を自らへと呼び戻す(revocare)御言の本性において、神が言ったことは非物体的であると理解する。それは無形のままではなく、秩序によって生じる個々のものに即して形相づけられるためである。その向き直りと形相づけによって、被造物は固有の仕方で御言たる神――すなわちそこでは子と父とは一なるものである完全な類似と等しい本質によって、常に父に付着している神の子――を模倣するが、他方もし被造物が創造主から背反し、無形で不完全のままであるならば、被造物はこの御言の形相を模倣しない。それゆえ子についての言及は、「はじめに神は天地を造った」と言われているとき、御言であるからではなく、ただ始原であるからなされているのである。というのもここではまだ、被造物の始まりが、不完全なものの無形性において暗示されているから[22]。
>
> ……常に父と一体である御言――それによって神は永遠に全てのものを言葉の響きによってでもなく、響きの時間を測る思惟によってでもなく、己と等しく永遠の、己から生まれた知恵の光によって語る――の形相を、最高にして第一に存在するものに似ていないある種の無形性によって無に傾いているとき、不完全なものは模倣しない。しかしながら不完全なものが、常に不変的な仕方で父と一体である御言の形相を模倣するのは、不完全なものでも、真実に常に存在するもの、すなわち己の存立の創造主への、固有の類の向き直りに応じて、形相を捉え完全な被造物になるときであるから[23]。

ここで述べられている「御言の形相（forma uerbi）」とは、御言における範型としての理念（ratio）を意味すると思われる。霊的被造物であれ、あるいは物体的被造物であれ、向き直りによって、世界の秩序において固有の相応しい在り方をし、完全なものとなるのである。特に霊的被造物の場合、御言の形相（理念）は、それによって形相付けられる認識対象にして、至福にして安息

の場である。しかもここでは「模倣する（imitari）」と言われているように、御言との完全な一致ではなく、分有でもなく、認識主体とそれが形相づけられる認識対象たる御言とを端的に区別する言い回しがとられることにより、創造論におけるキリストの位置づけが明確にされている。確認するならば、霊的被造物の場合、形相・質料の用語は、創造論における被造物本来の固有で完全な在り方と不完全な在り方を示す言葉として使用されている。霊的被造物の場合、御言の本性である呼び戻しに応える（帰還する）という仕方で造られる（完全な在り方をする）ことを、形相付け（formare）という言葉によって端的に表現されているのである。このように御言・イエス・キリストを介在することによって、伝統的な形相・質料という概念に新たな用語法（意味）が付け加えられているのである。

四．霊的知性的被造物の在り方と認識における創造

『創世記』冒頭の霊的被造物の創造について論述を進めてきたが、アウグスティヌスは創造の六日間の業を、霊的被造物（天使）によって同時に（非時間的）認識される仕方で行われた創造であるという独創的な解釈に行きつく。

> 最初に造られたかの光（Gen. 1,3.）が物体的でなく霊的であるならば、ちょうど闇の後に光が造られたように――そこで光は自らのある種の無形性から創造主に向き直り形相づけられたと理解される――夕べの後に朝が生ずるのである。というのも光（霊的被造物）が神とは同じでない自らの固有の本性を認識した後で、神御自身である光〈イエス・キリスト〉を讃えるために自らを帰還させ、その観照によって形相付けられるのである。[24]

この「夕べ」と「朝」の記述について、アウグスティヌスはさらに次のように言う。

> それゆえ聖なる天使たち――もし復活後終末に到るまで、キリストがわれわれのためになられた道を保持するならば、われわれも彼らと等しくされる――は、……自分たちも第一のものとして造られた全ての被造物を神の御言そのもの――その御言において時間的に造られた全てのものどもの永遠の理念（aeternae rationes）がある――のうちに、まず先に認識した。その次に、いわば下に見下ろすように被造物を被造物そのものにおいて知る。そして被造物を神の讃美へと帰還させる。天使は不変の真理において、それによって被造物が造られたところの諸理念を根源的に見るのである。[25]

アウグスティヌスにとって霊的被造物は、明らかに人間の魂の至福の状態の雛形として考えられている。[26] 人間の魂もまた霊的被造物であるが、まずは最上位たる霊的被造物（天使）の創造（形相づけ）によって、人間の魂ひいては被造物全般にまで、それらが神によって造られた限り、それ固有の仕方で、階層的に、向き直り（conuersio）そして帰還（referre）させられるという上昇の構造をもつ普遍的な世界像が看取されるのである。

五．残された課題 ― 物体的被造物の帰還構造 ―

このようにアウグスティヌスは、『創世記』注解において――伝統的な教父の解釈を踏まえながらも――イエス・キリストを定位し、独創的な仕方で被造物の帰還構造を読み込み、創造の業を理解するに到った。プロティノスの流出論における上昇と下降の存在の連続性は、キリスト教においては拒否されなければならないが、その思想を十分生かした解釈であると考えられる。

ところで神の讃美へと向き直ることによる被造物の帰還・形相づけの構造は、全被造物すなわち人間の魂を含めた霊的被造物も物体的被造物も全てに渡るものでなければならない。アウグスティヌスのテキストでは至る所に、被造物が神を讃美する言い回しが看取される。[27] 他方、創造主と被造物との間に断絶があるように、霊的被造物と物体的被造物の在り方の峻別も厳しい。しかしアウグスティヌスにとって、霊的被造物の認識が先立って物体的被造物が生じるという彼の独創的な解釈のもと、階層的な創造の下降構造を持っている。また同時に物体的被造物は霊的被造物によって創造主を讃えるという帰還構造を持っているが、それはいかなる仕方で可能であろうか。

実際彼は、時間的に被造物が生起するのは『創世記』第二章六節以降であると考えているが、[28] はたしていかなる仕方で物体的被造物は創造主に向き直り関係付けられるのであろうか。人間の魂にとってはイエス・キリストを仲保者として向き直るという、存在論的な基礎付けが考えられている。残された問題は帰還の道がいかなる仕方で物体的時間的被造物に適用されるかということである。アウグスティヌスの創造論の中に、その自然学的・思弁的に整合的な説明が、いかなる思想のもとで行われているかを考究することを、今後の課題としたい。

【註】

(1) アウグスティヌスの『創世記』冒頭の注解書は以下の通りである。
『マニ教徒を論駁する創世記注解』*De Genesi contra Manichaeos* (388-390)
『未完の創世記逐語注解』*De Genesi ad litteram, liber imperfectus* (393-394)
『告白』第一一～一三巻 *Confessiones* (397-c.400)
『創世記逐語注解』*De Genesi ad litteram* (401-414)
『神の国』第一一・一二巻 *De Civitate Dei* (c.416-420)

(2) *Confessiones*（以下 *Conf.*）XI, c. 3, 5. Audiam et intellegam quomodo in principio fecisti caelum et terram.

(3) *De Genesi ad litteram*（以下 *De Gen. ad. Lit.*）I, 1, 2. Et quomodo possit ostendi Deum sine ulla sui communicatione operari mutabilia et temporalia?

(4) *Enneades*, III, 7, 11.

(5) *Ibid.* III, 7, 7.

(6) 『告白』第一一巻とプロティノス『エネアデス』第三論集第七論文との親近性については拙論「キリスト教創造論と新

プラトン主義――アウグスティヌスとプロティノスにおける永遠・時間――」（山口義久編「プラトン主義の受容と変容を通じての古典の普遍性の研究」科学研究費補助金研究成果報告書）二〇〇六年参照。

(7) *Conf.* XI, 13, 16. Nec tu tempore tempora praecedis: alioquin non omnia tempora praecederes. sed praecedis omnia praeterita celsitudine semper praesentis aeternitatis et superas omnia futura, quia illa futura sunt, et cum uenerint, praeterita erunt; tu autem idem ipse es, et anni tui non deficient.

(8) *Ibid.* XI, 14, 17. fidenter tamen dico scire me, quod, si nihil praeteriret, non esset praeteritum tempus, et si nihil aduenirет, non esset futurum tempus, et si nihil esset, non esset praesens tempus.

(9) *Ibid.* XI, 14, 17. duo ergo illa tempora, praeteritum et futurum, quomodo sunt, quando et praeteritum iam non est et futurum nondum est? praesens autem sisemper esset praesens nec in praeteritum transiret, non iam esset tempus, sed aeternitas. si ergo praesens, ut tempus sit, ideo fit, quia in praeteritum transit, quomodo et hoc esse dicimus, cui causa, ut sit, illa est, quia non erit, ut scilicet non uere dicamus tempus esse, nisi quia tendit non esse?

(10) *Ibid.* XI, 28, 37. Sed quomodo minuitur aut consumitur fturum, quod nondum est, aut quomodo crescit praeteritum, quod iam non est, nisi quia in animo, qui illud agit, tria sunt ?

(11) *Conf.* XI, 28, 38. アウグスティヌスの時間論の主題が、本来創造と時間についてであることを考えれば、不自然ではない。『告白』の時点においてすでに、『創世記逐語注解』で論じられる問題の見通しはあったと言えよう。

(12) 時間論は「神は天地創造以前、何をしていたのか」というマニ教徒の問いに答える形で始まった。*Conf.* XI, 10, 12.

(13) *Conf.* XII, 5,5. 6,6. 8,8 etc.

(14) *Enneades,* II, 4, 1.-

(15) *De Gen. ad. lit.* I, 1, 2. Et quid significetur nomine caeli et terrae? ...An utriusque[spiritalis et corporalis] informis materia dicta est caelum et terra, spiritalis uidelicet uita, sicut esse potest in se, non conuersa ad creatorem — tali enim conuersione formatur atque perficitur; si autem non conuertatur, informis est — corporalis autem, si posit intelligi per priuationem omnis corporae qualitatis, quae adparet in material formata, cum iam sunt species corporum siue uisu siue alio quodlibet sensu corporis perceptibiles?

(16) 「選びにおいて先行する」秩序については、アウグスティヌスが『創世記』冒頭において、第一の被造物として霊的被造物の創造を読み込むことに傾斜し、ひいてはDeusは父なる神、principiumは御言・イエスキリスト、Spiritus Deiには聖霊を読みとる有効な秩序として機能している。なぜ

patri, qua ipse et pater unum sunt, non autem imitantur hanc uerbi formam, si auersa a creatore informis et inperfecta remaneat, propterea filii commemoration non ita fit, quia uerbum sed tantum, quia principium est, cum dicitur: in principio fecit Deus caelum et terram; exordium quipped creaturae insinuator adhuc in informitate inperfectionis.

(23) *De Gen. ad lit.* I, 4, 9. ... quia formam uerbi semper patri cohaerens, quo sempiterne dicit Deus omnia, neque sono uocis neque cogitatione tempora sonorum uoluente, sed coaeterna sibi luce a se genitae sapientiae non imitatur inperfectio, cum dissimilis ab eo, quod summe ac primitus est, informitate quadam tendit ad hihilum, sed tunc imitatur uerbi formam semper atque incommutabiliter patri cohaerentem, cum et ipsa pro sui generis conuersione ad id, quod uere ac semper est, id est ad creatorem suae substantiae, formam capit et fit perfecta creatura?

(24) *De Gen. ad lit.* IV, 22, 39. ut, si lux illa, quae primitus creata est non corporalis sed spiritalis est, sicut post tenebras facta est, ubi intellegitur a sua quadam inormitate ad creatorem conuersa atque formata, ita et post uesperam fiat mane, cum post cognitionem suae propriae naturae, qua non est quod Deus, refert se ad laudandam lucem, quod ipse Deus est, cuius

ならそれらは物体的被造物よりも、価値の上ですぐれているから先に記述されたという解釈へと導く根拠となっているからである。

(17) cf. *De Gen. cont. Man.* I, 3, 5.

(18) *De Gen. cont. Man.* I, 5, 9., 6, 10.

(19) この解釈の可能性はすでに『未完の創世記逐語注解』で提示されている。

(20) *Conf.* XI, 8, 10. nisi quia omne, quod esse incipit et esse desinit, tunc esse incipit et tunc desinit, quando debuisse incipere uel desinere in aeterna ratione cognoscitur, ubi nec incipit aliquid nec desinit. aeterna ratio が複数形で使われる場合は註二五参照。

(21) *Ibid.* et ideo principium, quia, nisi maneret, cum erraremus, non esset quo rediremus. cum autem redimus ab errore, cognoscendo utique redimus ; ut autem cognoscamus, docet nos, quia principium est et loquitur nobis.

(22) *De Gen. ad lit.* I, 4, 9. Ut in eo, quod scriptura narrat: Dixit Deus: fiat, intellegamus Dei dictum incorporeum in natura uerbi eius coaeterni, reuocantis ad se inperfectionem creaturae, ut non sit informis, sed formetur secundum singular, quae per ordinem exequatur. In qua conuersione et formatione quia pro suo modo imitantur Deum uerbum, hoc est Dei filium simper patri cohaerentem plena similitudine et essential

contemplatione formatur.

(25) *De Gen. ad lit.* IV, 24, 41. Quapropter, cum sancti angeli, quibus post resurrectionem coaequabimur, si uiam—quod nobis Christus facta est—usque in finem tenuerimus ... in ipso uerbo Dei prius nouerunt, in quo sunt omnium, etiam quae temporaliter facta sunt, aeternae rationes, tamquam in eo, per quod facta sunt omnia, ac deinde in ipsa creatura, quam sic nouerunt, tamquam infra despiciens eamque referens ad illius laudem, in cuius incommutabili ueritate rationes, secundum quas facta est, principaliter uident.

(26) e.g. *Conf.* XII, 11, 12-14., *De Gen. ad lit.* IV, 24, 41. etc.

(27) 物体的被造物による神への讃美については、松崎一平『告白』第七巻第一三章一九節と詩編一四八編――アウグスティヌスと詩編――（新プラトン主義研究五）二〇〇六年に言及されている。*De Gen. ad lit.* V, 7, 20. Quod ergo sequitur: fons autem ascendebat de terra et inrigabat omnem faciem terrae, hinc iam, quantum arbitror, intimatur, quae fiant secundum interualla temporum ex illa prima conditione creaturarum, ubi facta sunt omnia simul.

(28) 片柳栄一訳『アウグスティヌス著作集』一六・解説によれば、時間の根・種子が時間的展開を通して、隠れから現われへ生起するアウグスティヌスの考えに、ストア派の胚種的理性の影響を認めている。